

丹波市
地域おこし
協力隊

地域おこし協力隊の活動を報告します

自然エネルギーの地域循環をめざす

あけみ
阪口 明美さん vol.41

経歴：大阪府出身。大阪で会社員をしながら林業を学んだ後、山に関わる仕事を求めて丹波市に移住。

任期：平成31年1月～



こんにちは。平成31年1月から地域おこし協力隊として活動している阪口です。3年間の任期もついに後半戦に突入しました。

私に関わる「丹波市木の駅プロジェクト」では、市内の森林から切り出された間伐材^{かんぼつ}を買い取り、薪（燃料）にして販売するという、自然エネルギーの地域循環を目指した活動をしています。

活動の一環として、安全に山林作業が行える技術・安全管理知識を習得するチェーンソー講習や薪割り体験会、親子で間伐体験をするイベントなどを企画し、開催してきました。また、今年のゴールデンウィークには、新型コロナウイルスの影響で遊びに行けない地元子どもたちを、薪のストックヤードなどに

使用している春日地域の「まきんこの森」に招き、遊び場として利用してもらいました。

木の駅プロジェクトを通して多くの人が山に入ることで、森や林業に興味を持つきっかけになれば嬉しく思います。そしてこの活動の広がりと共に地域活性化に貢献できるよう、これからも頑張っていきたいと思っています。



木を間伐し、間伐材の薪を使ってお湯の沸かし方を子どもたちに指導する阪口隊員（右）

市長コラム
丹波語り

誇りを失えば、
全てを失う



今から25年前、阪神淡路大震災からの復旧途上で、当時の兵庫県知事・貝原俊民氏（かいばらとしたみ）は兵庫県庁の庁内放送でこのような言葉を述べられました。

『財産』を失っても何もなくなし
たことにならない。『勇氣』を
失ったら多くがなくなる。『誇
り』を失えば全てがなくなる」

この言葉は、第2次世界大戦の敗戦後、西ドイツ経済を奇跡の復興に導いたルートヴィヒ・エアハルト首相が好んで使った言葉です。震災で多数の県民が悲嘆にくれる中、多くの場所ですられたであろうこの言葉は、人々を勇気づけました。

当時私は県職員として、建築家の安藤忠雄氏らの設計で、淡路島北部の広大な土地に国際的交流拠点「淡路夢舞台」を建設するプロジェクトチームの一員でした。しかし、被害総額10兆

丹波市長 谷口進一



安藤氏（左）と貝原氏

円とも言われた大震災を目の前にして「このプロジェクトは中止を止むなくされるのだろう」と観念していました。

ところが、大震災から1カ月後の政策会議の場において、貝原知事の判断は一言「奇貨^{きか}おくべし。」被害は甚大であったが、単に元に戻す【復興】ではなく【創造的復興】をめざすためにはこのプロジェクトの旗は降ろさない。むしろこの大災害をバネにして、震源地から発展の礎を築いていこう！との大号令でした。

その3年後に世界一の明石海峡大橋が開通し、さらに2年後「淡路夢舞台」は完成しました。

貝原知事による大きな政策判断の現場に立ち会えたことは私の誇りであり、仕事に向き合う上で大切になっている姿勢です。